永平高祖行状摘要

木村文明編

全

特36
3

東京圖書館
新書門
部
類
函
架
號
冊

019351-000-5

特36-3

永平高祖行状摘要

木村　文明／編

M18. 2
ABG-0042

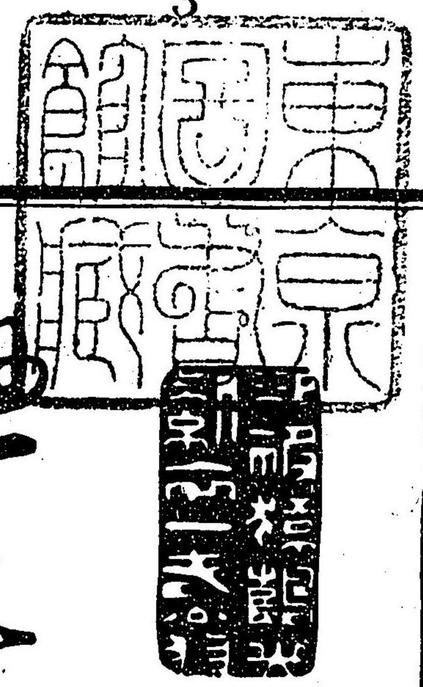
宮城縣陸前國

永平高祖行狀摘要

木村文明編輯

宮城縣曹洞宗學
支校書籍調進所　靜雲堂藏版

特36
3



一經通

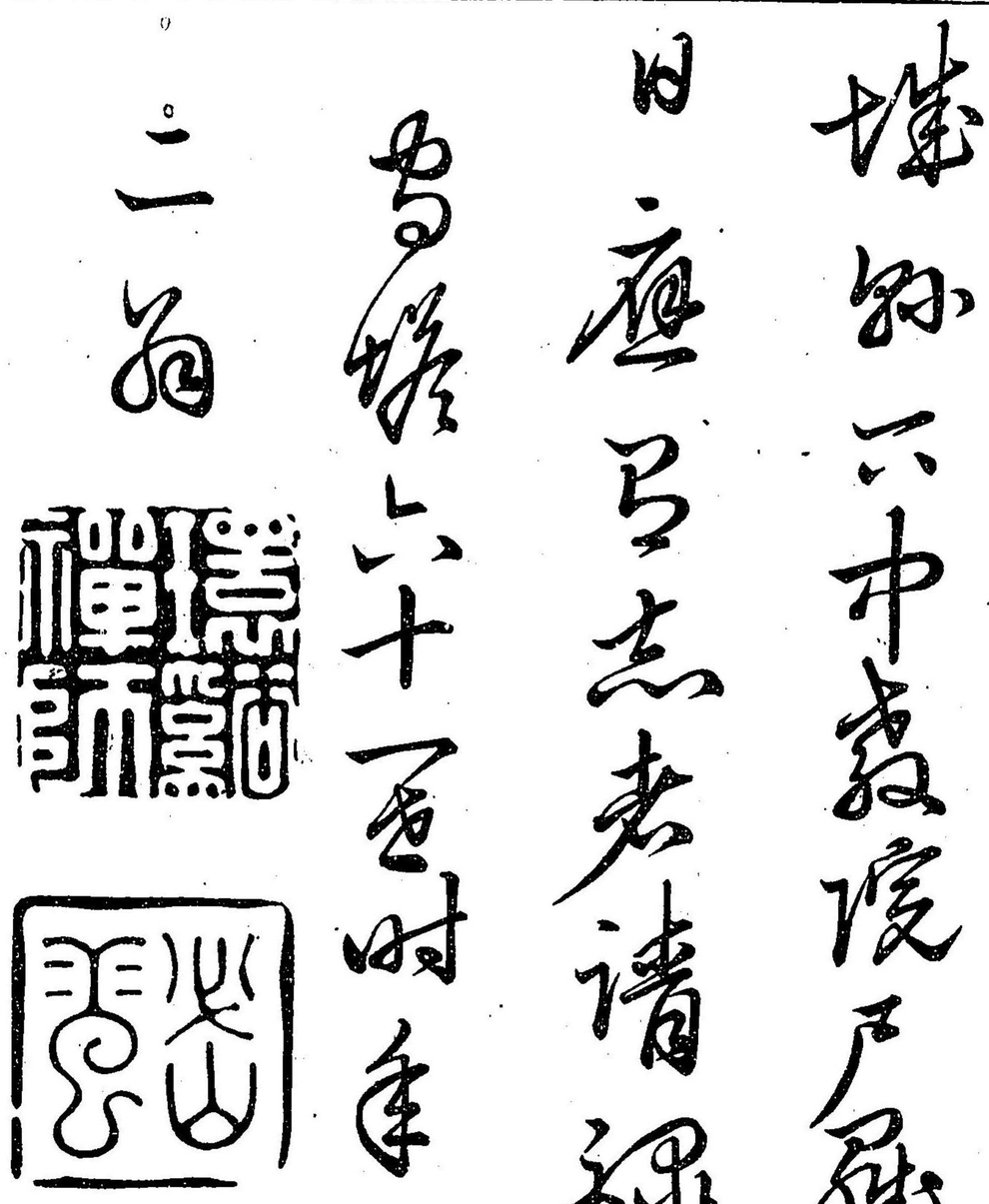
穀梁

二十四卷

生子與為將
吾門孤素業
勿令

祖業墜

皇朝紀元之二年五月三十
八年五月廿五日于宮



目次

京兆誕生　參見知識
入宋求法　江西伏虎
稻荷授藥　建立興聖
血脉度靈　鎌倉招請
賜紫徽號　示現圓寂

久我家世系

- 村上天皇（人皇六十二代）
  - 具平親王（二品中務卿）
    - 右大將源師房（賜源姓）
      - 右大將顯房（号六條）
        - 大政大臣雅實（久我家祖）
          - 右大臣雅定
            - 內大臣雅通
              - 內大臣通親
                - 大政大臣通光
            - 右大將通忠
              - 內大臣通基
                - 大政大臣通雄
            - 大政大臣長通
              - 大政大臣通相
                - 大政大臣具通
            - 大納言通宣
              - 大政大臣清通
                - 大政大臣通博
            - 右大臣豐通
              - 右大臣通言
                - 大納言晴通
            - 大納言通堅
              - 大納言敦通
                - 中納言通前
            - 右大臣廣通
              - 內大臣通誠
                - 右大臣惟通
            - 內大臣通兄
              - 權大納言敏通（早世）
                - 內大臣信通（通兄二男）
            - 內大臣通明
              - 內大臣建通
                - 大納言通久

△内大臣右大将源通親

- 通宗　贈左大臣
- 通具　号堀川大納言
- 通光　刑部卿藤範兼卿女従三位則子
- 定通　号後土御門
- 通方　号土御門大納言
- 通行　号御門大納言
- 親縁　大僧正真福寺別當
- 證空　号善惠上人西山浄土一派祖法然上人資
- 道元　越前國永平寺開祖
- 雲快　号中山僧正
- 定親　東寺長者大僧正号今熊野別當
- 在子　兼明門院土御門院國母
- 親子　従二位大納言後差裁院御乳母
- 女子　中務卿宗尊親王女房

永平高祖行状摘要

宮城縣　水村文明謹輯

京兆誕生

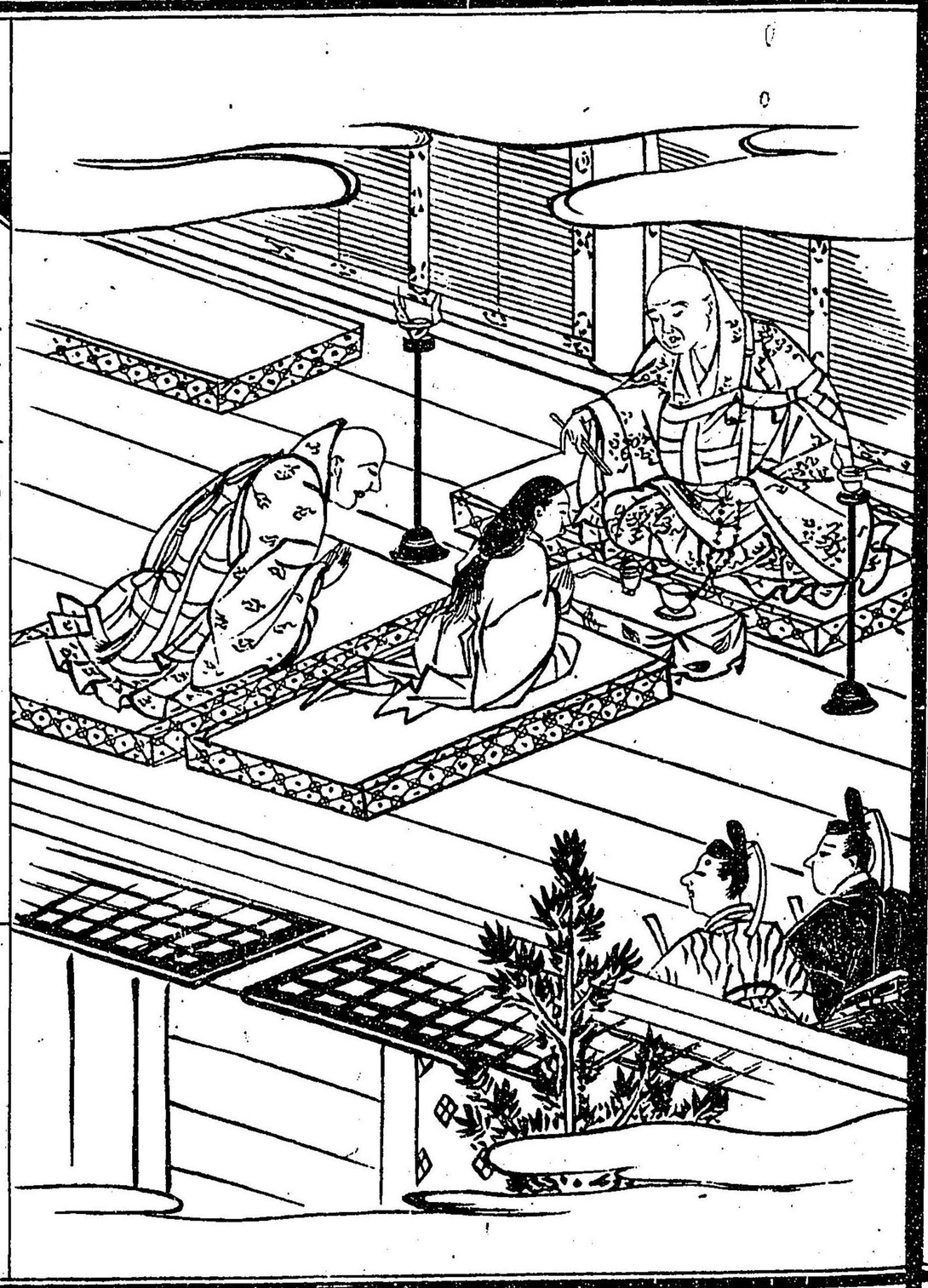
我宗祖永平開山佛性傳東國師道元禪師ハ人皇第六十二代村上天皇九代の苗裔后中書王具平親王八世の後胤久我内大臣通親卿の御子にて母ハ九條摂政基房公の娘なり母君懐任のとき空中に聲あり告て曰く此児ら五百年以来肩を齊そふものなき大聖人なほべ一今和國に正法を興隆せんのたゑに生るゝと人皇八十三代土

御門天皇正治二年庚申正月二日に誕生まして相人視て曰く此児は常の童児に異なり必ず是大聖人ならん七處平滿し眼に重瞳あり是凡流にあらざるへしと建仁三年癸亥師四歳にして李嶠の百詠を讀たまふ（李嶠字は臣山唐朝の人）建永元年丙寅師七歳にして毛詩左傳を讀たまふ耆老の名儒見て大に讃美して曰く是凡人にあらず大器の神童なり

叡岳雜染

兼元元年丁卯師八歳の冬悲母の喪に遇て香花の烟を觀して密に世間の無常なることを悟り深く求法の大願を發したまふ初發心時便成正覚と誠なるかな同二年戊辰師九歳にして世親菩薩の倶舎論を讀たまふ時の人其利根なること文殊の如しと稱せり此歳外舅松殿禪定殿下師家公（前関白基房子）師を取て猶子とす國の切要を教へ家の大事を授け朝廷の要臣とせんと思ひ元服せしめんと計ひしに師傳へ聞て自ら以為らく是我所望にあらず如何せんと終に建暦二年壬申師十三歳の春夜

中に忍び出て木幡の山莊に到り殘れる叡山の良觀法眼を訪て出家を求めたまふ（法眼ハ基房の子師の母兄なり）法眼大に驚き問て曰く元服斯に近し親戚其憤あらんと師曰く我悲母逝去の時遺言して曰く汝出家學道して我後世を吊ふべしと故に我出家して彼の菩提を吊ひたんとのたまふ法眼聞て感涙を催ち即ち許して室に入しむ建保元年癸酉師十四歳四月九日初て叡山の座主公圓僧正に就て髪を剃たまふ同十日延暦寺の戒壇院に於て菩薩戒を受たまふそもそもより晝夜意



をさげきして天台の宗風大小乘の義理悉く修習せちはいをし

參見知識

建保二年甲戌師十五歲熟々經論を涉獵して自のら疑あり顯密二教ともに說く本來本法性天然自性身ともし如是ならば三世諸佛甚にくりてこの更に發心して菩提を求めんや時に山門の春宿に質そに呑釈そはしものをし因ふ三井寺の公胤僧正の有名を聞き師往て前疑を問たまふ胤呑て曰くなを輙そくを呑ふべからに宗義ありといへとも恐くハ理を尽さば須らく建仁寺榮西に參問そべしと師即ち榮西禪師に到り便問。本來本法性。天然自性身。為什麼。三世諸佛。發心成道ど。西曰。三世諸佛不知有狸奴白牯却知有ど師此に於て伏膺そ初て臨濟の宗風を聞たまふ明年師十六歲時に榮西禪師七十五歲にして七月七日に示寂そ乃ち法嗣の明全和尚に師事して霜華速ふ九回を歷たり建保三年乙亥より貞應二年癸未に至まて建仁に在て大藏經を周覽そふこと再次あり又明全和尚に從て佛祖正傳の

大戒を傳受せり

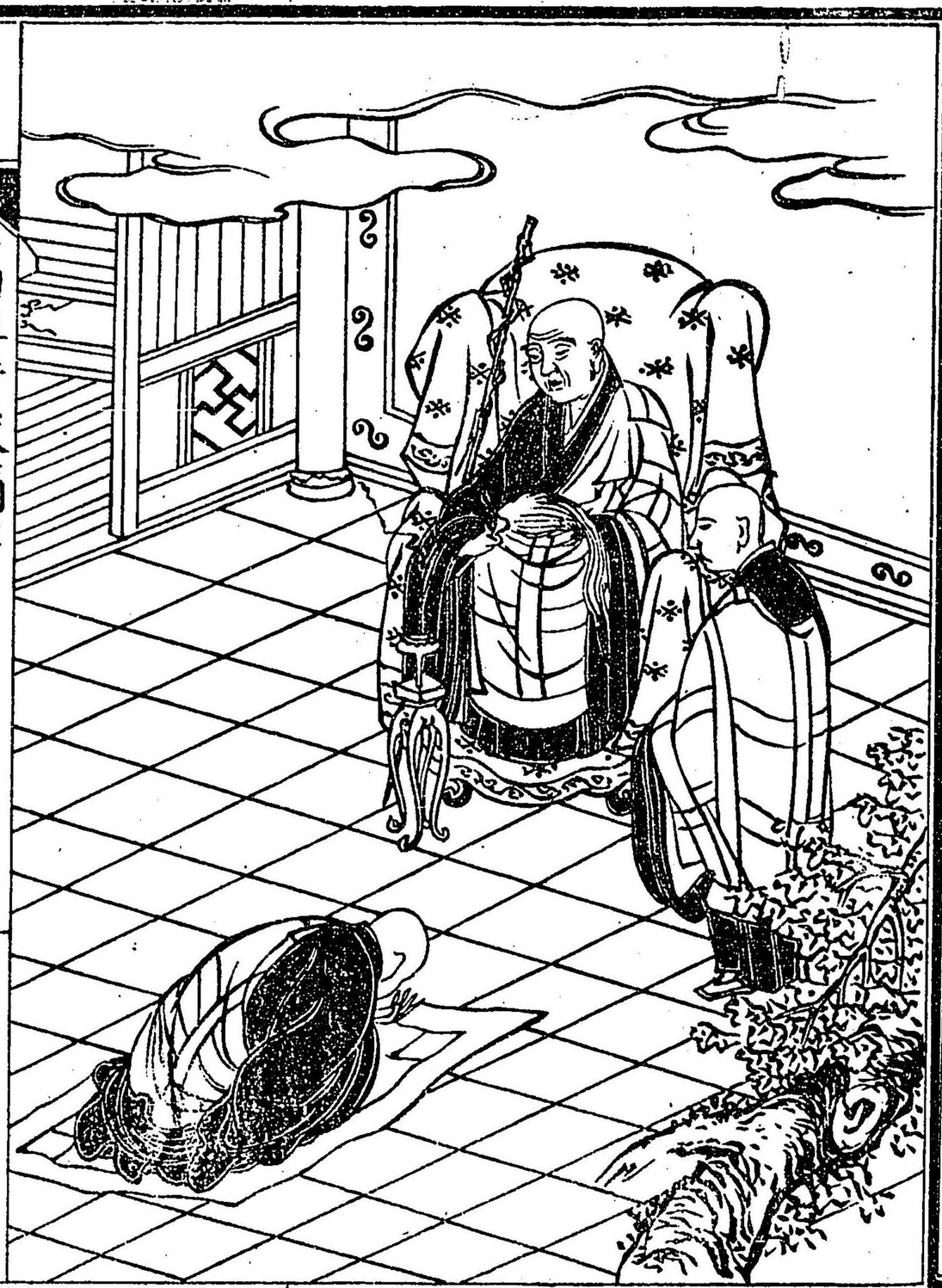
入宋求法

貞應二年癸未師二十四歲の春明全和尚に隨伴して二月二十二日筑前博多の津に赴き三月下旬に纜を解けり大宋嘉定十六年四月明州の界に着岸せり五月中旬船中にあり時に育王山の典座來て相見問答したまふ典座教訓に出つ秋七月初て天童山に登り無際禪師諱了派嗣法于佛照光大慧杲之孫に掛搭したまふ然に師は邊夷外國の人なりとて新戒の列に位を序せり時に師謂て曰く釈氏は法臘に依て世齡を用へは如何して此の如く顛倒せはは我はきを改免ばらんやとて宋帝に上表して僧次を質さんことを訴ふ然とも未た敕裁をあめけきば再ひ戒次を正さを請ふ時に寧宗皇帝自のら表を見てまばく感感ありて遂に天童山に敕して戒次を格定せしむ是より師の雄名五嶽に流布せりとそ一日師僧堂に在て鄰單の僧毎旦袈裟を頂戴して搭ふを見て感泣したまふ傳衣卷に出つ宝慶元年乙酉師天童に寓して まちに二歲に近し無際禪師の許可を蒙ふあと

數回ふりといへとも自のらおもを肯ひたまは
ゝ天童を出て徑山の淅翁如琰禪師嗣佛照光に參問
そ又育王に遊て壁間に圖セ㐂圓月の相を指し
て成桂知客を勘驗したまふ佛性卷に出つ又平田の萬
年寺に到て元鼎和尚に見て嗣書を拜覽し燒香
恭敬したまふ嗣書卷に出つ

天童得法

師無際禪師を辭して諸方を遊歷し諸山の知識
に參見したまひとも師範とすべき遇量の人ふ
ゝに因て又再ひ無際和尚を訪て天童に歸らん



どりたまふ途すがら無際の示寂せしことを聞き大に嗟嘆して歸郷の念萌しさまふ故に明全和尚の天童に寓をはを訪ひ再び登山したまふ途中に老璡と云ふ僧ありて羅漢の應現ありと云ふ告て云く今天下の宗匠ハ如浄禪師に過たるなし此頃敕請に應じて天童に住したまふ汝早く山に登て参見せよ必ず所疑を釈かんと師古き聞て大に喜び急き天童に登りたまふ即ち天童古佛を妙高臺に燒香禮拜す浄祖告て云く佛々祖々の法門現成せりと師即ち拜を設く實に宝慶元年乙酉五月一日なり（面授巻に出つ）浄祖左右の侍者に告て曰く前夜悟本大師を迎ふと夢ふ此子恐はくは大師の再生か我宗他に憑て大に世に奥らんと（是より後天童に咨問の審細皆宝慶記等に出つ）因に明全和尚を訪ひたまふに重病に罹て了然寮に卧したまへり師の到ふを見て喜感悲泣頻をりその病況重ふして終に五月七日に示寂せり年四十二歳なり師一日坐せふ次て浄祖責て禪衲坐睡を曰。参禪須身心脱落只管打睡堪為什麽。師於傍豁然大悟直上方丈燒香浄問曰。燒香事作麽生。師曰。

身心脫落来。淨曰。身心脫落。脫落身心。師曰。這個是暫時伎倆。和尚莫妄印某甲。淨曰。吾不妄印汝。師曰。如何是不妄印底。淨曰。脫落身心。師禮拜。時に福勍の廣平侍者傍に在て云く外國の人恁麼なほさとを得たりまさとに細事にあらずと師珍重して出つ遂に九月十八日に至て佛心宗を稟受したまふ是を即ち西来相兼の嫡傳なり

江西伏虎

寶慶二年丙戌師時に太白峰を下て江西に遊歷す日暮に猛虎の忽ち来ふに値て拄杖を擲て岩上に坐したまふ虎怖畏して去ふ後見たまふに是拄杖の龍と化したふをり今に虎てゐの拄杖と稱をふを是なり此事祖師の在世に知ふものなのりき滅後に寒巖義尹和尚入来して彼地の叢林まて龍頭ふ僧の踞て虎の拄杖を嚼む圖を畫せはを見て奇異に思ふ其因緣を尋ふに前年日本ゝり南渡せは道元僧江西ふて猛虎の難に値ふ拄杖を擲て巖上に避て坐せらきるふに虎初免い拄杖に嚼つくと見へしか遂に跡をも見ぢして逃去也道元巖を下ふとて見をば岩上に

ハ非ばして拄杖の龍と化したふ頭上に安坐せうきしありと時に寒巖感聿して自畫に寫して歸東せられ初めて日本に普知せり寒巖の自畫今に江刄大津ハ青龍寺に現在せ

稲荷授藥

又歸路に師身體困羸して死に幾しされとも醫藥の方便なし時に欻然として白髮の老嫗出現して一丸藥を與へて忽ち醒蘇せ師其姓名を問ふ老嫗云く吾是日東稲荷神なり元公求法の善心を感して常に擁護せ故に今急を救ふと云云

道正時に藥方を神嫗に傳ふ道正家傳の解毒丸是あり師道正に謂て云く斯實に神授の妙劑大法守護の製あり日東に歸て法流後世に盛ならば則汝の子孫毎歳吾後昆の諸刹に贈ると是故に今に至て其遺戒に背のさはものあり道正俗名縣山左兵衛督正四位下藤原隆兼世々京兆木下に居る故に氏を木下と稱る京極相國為光公九世の裔顯盛の男あり治承年中外祖父源仲家宇治川に戰て敗績自殺る是に由て遁世薙髮る乃ち祖師に隨伴して宋に入て天童淨和尚に見ゆ朝廡前有鷄聲淨曰聞麼道正言下豁然たり歸東の後宝治二年戊申七月二十四日卒る

航海歸朝

宝慶三年丁亥（本朝安貞元年）冬天童淨古佛に告暇した夢ふ即夜半授芙蓉楷祖法衣等云汝以異域人授之表信歸國布化廣利人天莫住城邑聚落莫近國王大臣只居深山幽谷接得一個半個勿令吾宗致斷絶云云。その夜佛果の碧岩集を得て自ら繕寫したまふ心中全備したまふを感ふに忽ち白衣の神人来て助毫畢る（此真本いまだ太乘寺に秘藏して一夜碧岩

と稱せ是を日本の白山妙理權現かり速に歸楫を理免船を發して招宝山下を過たまふとき偉人船舷に立て告て云く吾是大權修理菩薩かり師の祖印を嗣て歸ふを知ふ願ハ扶桑に隨從して永く法幢を護せんと云云船中一日颶風に値ふ舟人色を失い措く所を知らに時に師船上に黙坐し普門品を讀誦したまひ忽ち觀音薩埵蓮葉に乘ド海面に出現して風波即時に怙如たり所謂。念彼觀音力。波浪不能沒ど。信かふ哉乃ち李朝安貞二年戊子春正月十八日肥後の川尻に着

岸したまふ拯れくり洛陽に到り建仁寺に寓居したまふ凡そ三載を經たり寛喜二年庚寅冬洛東建仁くり深草極樂寺の別院安養院に移て閑居したまふ廣錄に閑居偶作六首を載せ今此に其一首を採記せ

生死可憐雲、愛更。逆途覺路夢中行。唯留一事醒猶記。深草閑居夜雨聲。

建立興聖

天福元年癸巳師三十四歳弘誓院（藤氏系圖云敎家權大納言号弘誓院後京極殿息正覺禪尼室か未詳）歸敬狼切かり以為

らく禅宇一所を建立し師を請して祖道を發揮せしめんと即日に地をトし深草極樂寺の舊趾に就て工を誓へ材を伐り不日に落成せ二人師を邀て開山第一祖と為さしむ入院のもし免興聖宝林寺と號せ興聖ハ支那徑山の寺號かして宝林ハ曹谿の寺號なり是に於て祖師此を並采て今開闢せふ所の寺に名けたまふ舊の極樂寺ハ藤原昭宣公大織冠より八世の裔摂政大政大臣基經より関白戚の最初なり の建ふ所なり初め仁明帝曾て芹川に行幸せ是日御愛の琴の爪を失せ時に公童子たり供奉の列にあり帝公に命して求免しむ公心中に三宝を念じ且つ誓て曰く吾若琴の爪を求得せ其處に就て一精舎を建立し三宝の德に酬へんと果して深草に於て求得たり後遂に極樂寺を創建せと云ふ文暦元年甲午懐奘和尚師に深草の精舎に見て衣を易ふ嘉禎二年丙申十月十五日興聖寺に於て開堂あり是より吾曹洞の一宗天下に弘通せ

血脉度霊

波多野雲孚の刺史藤原義重越前を知せ一女あ

り資貌都て雅かり召して左右に侍しむ夫人嫉て之を疾むこと甚し義重上命を奉て京師に往く女を攜ふこと能こに別室を造り之に居らしむ是に於て夫人女を取て山中の深池に沉めし女恨を懷て死せ既に厲鬼と為て毎夜叫喚の聲を作せ聞もの惧きはいふし時に僧ありて菴地を尋て路を村民に問ふ村民云く近ころ妖怪出て往来あし往来のれど僧云く我之を驗みんと云て乃ち往く池邊の樹下に到り坐して三更に至り俄に冷風起り波濤震動せ暫くありて一

女髪を被り水面に起立を卒然として僧の前に到り坐して涕泣を僧云く汝ハ是何人ぞ女の云く妾ら義重に侍そふ婢女ぁり夫人のため此池中に沈められたり欝憂解けたその如何そべきを知らに願くハ之を義重に告て妾か為に冥福を修せ〜免よ僧云く何をか證ごそはお女乃ち袖を解き僧に與へて見へハ僧即ち京師に往て義重に告げ袖を出して証と為を義重大に驚き明日僧と與に深草に到り救濟を師にこふ師一物を把て僧に付與して曰く是佛祖正傳菩薩大戒の血脈ぁり我今是を以て靈に授くと僧疾かに越前に歸て池中に投を忽ち空中に聲ありて云く我今無上の妙法を得て頓に幽冥の苦を脱き疾に菩提の果を成ぜと聞もの希有の思ひを為を義重大に喜て精舎を構ひ師を請招して開山第一祖とな〜今の永平寺是ぁり池ら永平の境地にあり今に血脈池と號を是〜り菩提を欣求そふもの師の血脈を受けばと云ふこゃぁふ〜血脈を世俗に授與そはこゃ斯に權輿せり

永平開闢

仁治三年壬寅四月十二日近衛殿の請に應して垂誡あり同年中由良開山法燈國師興聖寺に掛錫あり衣を改て菩薩戒を受く（元享釈書に見へたり）同年十二月十七日波多野出雲守藤原義重の私宅に於て説法あり（波多野氏は藤太喬郷より十四代の孫波多野義通保元の頃左馬頭源義朝に不和にて洛陽辞し相州の波多野に居を故に氏とす義通より五代を義重と稱せ義重在京の時祖師に歸依し深草に參せら後に入道して大佛寺と号す戒名を如是元性と稱す）祖師興聖寺御住の間は天福元年癸巳より寛元元年癸卯に至まて十一個年なり（建長五年正嘉二年戊午正月二十三日卒去す祖師入滅後なり）

此深草の地は皇城に近して月卿雲客華族車馬往復不斷を厭ひ常に山林泉石の便宜を求めたまふ時に雲州太守義重言上す越前國吉田郡深山に安閑の古寺あり（永平寺の地元古寺の跡なり）某甲知行の内なり御下向在て度生説法あらば一國の大幸ならんと師答て云く吾先師如淨古佛は大宋越州の人なるべし越國の名を聞もなつかしし我所望なりとて御下向あるべしと御返答あり寛元元年癸卯七月十六日深草を發駕し越に着して最初は吉峰（今の永平寺の主山の背に當て松岡の溪の奥なり）に住せられ

て閏七月初一日に開示始まれり雲州太守並に今の南東郡の左金吾禅門覚念相共に禅苑を建立せんと欲し便宜の地を尋ぬ則ち市野山の東傘松の西に得て歓喜を太守自ら山を平け地を拂ひ吉峰の茅舎くり此地に移りたまふ同二年甲辰二月十九日法堂の地を平け礎石柱立て四月十二日上棟の儀式あり七月十八日開堂説法したまふ師今日くり此山を吉祥山と名け吉祥ハ帝釈宮の名又諸佛成道の時吉祥草を敷たまふ今地を平け伽藍を建立するはところ吉祥なり故に名く寺を大佛寺と号す大佛ハ雲州如是居士開基の号なり

説法の後師雲州に謂て云く吾在宋の時に天童先師坐禅の法要三十餘條を示したまふ其一に云く莫往観大海及惡畫傀儡等尋常應観青山谿水宝慶記に出つ此地この記に應ず林泉の風景望む所も亦足ぬ珍味ハ必ず良器に盛る香稲必ず滿足すべし是勝行の地にてのらぢらんや尤も興法の道場なり今此に到て自ら休す同年霜月三日僧堂の上棟あり参詣の男女一千餘人に白餅一枚づゝを賜ふ同三年乙巳四月結夏の日上堂の前後に天華乱墜して法席及ぶ衆僧の座

上奈盞の中まて散々入は誠に古今未曾有の奇瑞なりと云ふ同四年丙午六月十五日の上堂くり大佛寺を改て永平寺と稱せ永平の號は後漢の明帝永平年中佛法東漸せし曆號を采なり實は直指單傳の正法を祖師始て日本に弘通せはその御意ならん同五年丁未正月十五日布薩の時五色の彩雲方丈の正面にあらはれ半時ゑ一のり向め參詣の道俗數多見奉りて歡喜を生ぜり此瑞雲の記錄本山の宝庫に秘在せ

鎌倉招請

宝治元年丁未師四十八歳最明寺時頼祖師の道風を慕ひ招請ありけるに八月三日鎌倉に御下向在して菩薩戒を授け法號を道崇と名けたまふ其外道俗男女受戒の衆數をしらぬと云ふ時頼歸敬のあまり大禪苑を建立し開山と請ぜもとも固辭して就きたまはざる其時師を請せし禪苑は即ち今の建長寺なり後開山に蘭溪道隆禪師を請せらるしなり蘭溪禪師は寛元四年丙午三月に来朝して筑前博多の圓覚寺に寓居ありし其秋博多より永平祖師に呈せらるる書柬あり師鎌倉に寓在の時ふたたび祖師も亦御返書ありし師在宋の時天童山にて同床と見へたり又教外別傳の意を詠して最明寺殿に示せり

荒磯の波砕えて芳ぬ高岩ふかきゆはを面白

孔利ふ白いおを

時に貴賤道俗大に嘆美して詠歎せと云ふ同二年戊申三月十三日師鎌倉より越前に歸りたまふ後に最明寺殿報謝のため越前六條の堡三千石の所を永平寺領に寄進あるとも師受たまはず玄明上座古の寄進状の使せし意甚邪見なる

りとて即ち寺院を擯出し其坐禪の床下の土七尺まで除き棄てさせたさふと云ふ又今年四月より十一月十二日まで時々殊勝なる異香あり僧堂の内外に薫じ渡ふと云ふ同三年己酉正月一日羅漢供法會の時に木像畫像の羅漢共に光を放て供養を受たさふ此時の畫像祖師の筆記今常州若柴の金龍寺に秘在せ又東岩の長松に十六尊者諸眷屬等の應現ありしを今に羅漢松と稱せ其時に羅漢の遺在せりとて團扇一柄今に秘藏せ其樣槇榔扇に似て頗る大きり

建長二年庚戌大檀越雲州太守大藏經を書寫して永平寺に安置せ

賜紫徽號

建長二年庚戌師五十一歲時に人皇九十代後嵯峨院師の道譽を聞て紫衣を賜ふ師再三固辭したさひとも帝許したさひ故に高閣に秘して生涯被せず偈を作て上謝したさふ

永平雖谷淺。敕命重重。却被笑猿鶴。紫衣下走翁。

此偈せ諸傳違却あり今ハ永平祢球禪師の朝倉

義景に擧示せらるゝ說を以て寫すと云ふ同三年辛亥正月五日子の時に師華山院宰相入道と靈山院の庵室に佛法の談議在ます時山中に鐘の音數百聲ぞゝり聞たまひ宰相も不思議の靈地ぞりとて隨喜せり入道の具せらるゝ中將兼賴朝臣も一室に在ぞのら聞のに又右近藏人入道徑資法師その外の人々も聞のびと云ふ

講遺教經

建長四年壬子師五十三歳夏の頃より微恙まゝまゝ時に正法眼藏八大人覺の卷を示したまふ

是き須臾泥洹の時至ふを知ゝ免ゝて如來の遺教經を本とゝ最後の御教誨と見へたり」一者少欲ぞき名利を求ふぞなく無求無欲なきば患なくゝて能く諸の功德を生ぞはあり」二者知足ぞき世間の苦惱を脫せんと欲せば知足を觀ゝて我くり上を望むぞとふく其分に安ぶべゝ常に不足なくゝて安穩なり」三者樂寂靜ぞき人間の憒鬧を遠離ゝて山林の靜處に閑居ぞきば人天共に敬重ぞはあり」四者勤精進ぞき出家たはもの勤行ゝて懈怠せざきば事とゝて滿足せざ

はハ京」五者不妄念ならき善知識を求めば正念堅固にそべ〜諸の煩悩も自ら来らぢはあり」六者修禅定ならき心を静に收て坐禅をはあり自ら世間生滅無常の道理を知ふあり」七者修智慧ならき智慧ならきば自ら貪着なくして能く解脱を得ふあり」八者不戯論ならき種々の戯論ハ其心散乱して寂滅の樂を得ハ是故に捨離そべ〜」此八大人覚を修習せハ知らぢらんハ佛弟子にあらハと仰せらは故に髻珠領宝の如く常に頂戴受持そべ〜

示現圓寂

建長五年癸丑師五十四歳病悩に就き檀那雲州太守より頻に御上洛を勸め奉はにをり七月十四日孤雲栖禅師に二代の席を讓り八月五日越を發駕〜たまふ因に木部山に於て御詠あり

草の葉に首途せは身ゑ木部山雲に路あふ心地こそ侍

御入洛ありて高辻西洞院俗弟子覚念が宅に宿〜たまふ上皇醫官に詔〜て診候ありとのゆ或日室内を經行〜低壺に誦〜て言く若、於園中若、

於樹下。若於僧房。若於白衣舍。若在殿中。若山谷曠野。是中皆應起塔供養。所以者何。當知是處。即是道場。諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提。諸佛於此轉法輪。諸佛於此而般涅槃と誦し了て此文の下に妙法蓮華經庵と面前の柱に書付たまふ是ハ今俗家にて入滅あはせ故に諸佛如来も是の如しとのたまふ事り」又仲秋に月を御覧ぜのりて

まゝ見んと思ひし時の秋たまも今宵は月に

わられぬいとは

と御詠まゝしきせば侍者の僧俗みな感歎せしと

云ふ終に八月二十八日子の刻に到り自ら偈を書して涅槃したまふ尊偈に曰く

五十四年。照第一天。打箇跳。觸破太千。咦。渾身無着處。活陷黄泉。

と筆を收て示寂したまふ雲州太守天に仰き地に俯して五十四年の早逝を惜み覚念その外僧俗等悲嘆の色絶へに懐芙和尚ハ肝を潰し半時ばかり死に入りたまふ誠に人天の悲嘆鶴樹の夕に異ならに乃ち金龕を東山赤辻（赤築地ともいふ）の精舍に移して茶毘し奉り御舍利を宝輿に收て九月六日に發輿し同十日吉祥山に到りたまふ同十二日申の刻方丈に於て入涅槃の儀式あり如法に供養し法事勤行孝禮悉く在そこの如くせり御舍利を本山西北の偶に入塔し奉り兼陽菴と號す

永平高祖行状摘要畢

仙臺　畫師　華樊義德
彫工　江川彌三郎

明治十七年十一月十九日版權免許
同　十八年二月出版

定價十五錢

編輯人　宮城縣平民　木村文明
宮城縣下陸前國仙臺區新寺小路六番地

出版人　宮城縣平民　伊勢安右衛門
宮城縣下陸前國仙臺區國分町四丁目拾七番地